

山と博物館

第52巻 第11号 2007年11月25日

市立大町山岳博物館



撮影 佐伯尚幸

第七十五回 国際山岳連盟総会

尾形好雄

国際山岳連盟（UNION INTERNATIONALE DES ASSOCIATIONS D'ALPINISME、以下UIAA）の第七十五回総会が、十月三日～七日にかけて松本市のMウイニングで開催された。松本市での開催は一九九二年に次いで二回目。今回は松本市制一〇〇周年記念事業の一環として招致され、開催の運びとなった。

総会には日本を含む三十八カ国・地域の約一六〇人が出席。今回は、UIAA創立以来初めて欧州以外から選出されたカナダのマイク・モティマ新会長の元、昨年、カナダ・バンフでの第七十四回総会でUIAA傘下にあった国際スポーツクライミング連盟（INTERNATIONAL FEDERATION OF SPORT CLIMBING、以下IFSC）が分離独立した後の最初の総会となったが、IFSC総会も松本で同時開催となった。また、会長国が日本のアジア山岳連盟（UNION OF ASIAN ALPINE ASSOCIATIONS、以下UAAA）の総会も七日開催された。

UIAAも創立されて七十五年、今組織は「登山か競技か」で揺れ動いており、UIAAの役割は大きな転換期を迎えている。そしてこれはそのまま日本の加盟団体である日本山岳協会（日山協）の問題でもある。

（日本山岳協会海外登山委員長）

国際山岳連盟について

尾形好雄

UIAAは一九三二年八月二十七日にアルプスを舞台とする欧州諸国の山岳連絡機構に於いて結成され今日に至っている。この団体はスイス民法第六十条に基づいて設立され、本部はスイスのベルンに設置されている。

現在六十七ヶ国が加盟。登山というスポーツが国境を越えた円滑な運営、国際間に生ずる問題の相互協力に基づく解決、登山技術の

向上、自然保護、高所医学、ドーピング、その他あらゆる諸問題の解決・研究・改善・普及・教育等を行うことを目的として、遠征、医科学、登山、自然保護、安全、青少年の各委員会があり、これらの組織運営は、規約に従って執行されている。

日本は一九六七年にUIAA会長から加盟招聘を受け、諸般の事情で先ず日本山岳会が加盟。その後一九八〇年に日本山岳協会に加盟が移行された。

国際山岳連盟総会

第七十五回の本会議は、六日八時三十分からMウイングの六階ホールで英語の同時通訳付きで開始された。議事は事前にメールで配信された協議事項に沿って行われ、冒頭二〇〇六年カナダ・バンフ総会議事録の承認が行われ、承認された。

次いで新会長・マイク・モティマから就任後の活動方針について、各加盟団体との調和をもたらし、IFSCの分離で停滞した活動を一日も早く再建したい。UIAAのホームページで各国が日常的に意見交換できるようにしたい。山岳スキーとアイスクライミングについて国際オリ

ンピック委員会(IOC)と幾度か協議したが、二〇一四年の冬期五輪の正式種目として取り上げられなかったことなどが報告され、承認された。

専務理事報告

ジュディ・サフォード専務理事から事務局の二〇〇六年の総括と二〇〇七年の展望について報告。事務局スタッフ(五人)の映像紹介などがあり、承認。

財務報告

二〇〇六年の決算報告、二〇〇七年の予算執行状況、二〇〇八年の予算などについて報告があり、イタリア代表から旅費交通費が掛かりすぎている。インド代表からは委員会への予算付けなどについての質問があったが、提案通り承認された。

IFSC分離の件

IFSCのロゴがUIAAのロゴに似通っている、将来的にはIFSC独自のロゴを考えて貰いたい、で承認。

UIAA規約改定

ドイツ代表は「UIAA発展のためには、連盟創立の原点である登山に焦点をあてて活動すべきだ」と主張し、「UIAAが加盟するIOCからの脱退と、山岳スキー、アイスクライミングの両競技部門への支出は原資の一〇パーセント以下に抑さるべきだ」と提案した。これに対しては賛否両論が渦巻き紛糾した。先ず、UIAAがIOCから脱会する件の投票では賛成六、反対五十七、棄権四で否決された。次いで山岳スキーとアイスクライミングの競技スポーツに使う予算をトータル予算の一〇パーセントを上限とする提案については、賛成七、反対六十三、棄権三でこれも否決された。

次いでカリブ・ワーキング・グループから提案された規約改定についても紛糾した。先ずこの規約改定を二〇〇八年総会まで延期すべきだ、との提案があり、これは賛成二十二、反対五十二で否決された。その後、各条項について協議され、意見が伯仲した。カリブ案にたいして意見が出されるたびに賛否の投票が行われるので時間を要した。最終的に新規約は賛成五十三、反対十八、棄権三で承認された。

これで時間を食われたため委員会報告などは後日、UIAAのホームページで報告すること、先の議事に進んだ

その他

新規加盟としてオーストリアのスキー・マウンティニアリング協会とクロアチアの登山ガイド協会が承認された。一方、会費未納の五団体(ハンガリー、ルーマニア、モロッコ、



松本市で開催された国際山岳連盟総会のひとこま(撮影 佐伯尚幸)



日本山岳協会、UAAA 田中会長あいさつ(撮影 柳澤昭夫)



ライチョウの危機 (撮影 柳澤昭夫)

今後の課題

フィリッピン、リトアニア)については〇七年十二月までに納入しなければ退会を勧告すること、承認。ラトビアの脱会届の件、承認。UIAAの名譽会員にスペイン・バルセロナのジョルディ・ボンス・サングネス氏(七十二歳)が推挙され、承認。次回の理事会は〇八年五月十五日(ルーマニア)、総会は〇八年十月十六日(イラン・テヘレン)の日程が発表され、次期開催国のイラン代表団からは映像によるプレゼンテーションがなされた。以上で総会議事は全て終了し、閉会となった。

IOC加盟のUIAAは、山岳スキーの五輪競技化を目指している。然し、前述したようにドイツ、イタリア、オーストリアなどの欧州派は、UIAAは山岳スキー、アイスクライミングの競技部門を分離してIOCから



カナダの発表 (撮影 柳澤昭夫)

脱会すべきとの主張が強い。その一方で、イギリス、アメリカ、アジア諸国などはIOCでの活動は競技化にとどまらず、青少年の教育など登山全体の発展に役立っている。脱退すれば各国で保たれている五輪団体との良好な関係や資金援助が失われる。と反対意見が多い。欧州の一部の国を除いて殆どは、一つの山岳連盟が国からの助成金の受け皿となつて競技部門も管理運営しており、IFSCのように分離独立したところで、一競技一団体と枠を決められている国では、従来通りの組織の方がやり易いであろう。現に今回もUIAAとIFSCの役員を兼ねて出席した国が多かった。

これは日山協についても同じことが言える。今年の秋田わか杉国体を最後に国体の山岳競技から縦走競技がなくなり、来年の大分国体からはスポーツクライミングとボルダリングの二種目のみとなる。そうすると日山協加盟の四十七都道府県山岳連盟(協会)の中には、

国体から手を引きたいという県も出てくるであろう。現にこの件に関して緊急動議も出されている。連盟によっては、加盟団体が年々減少する中、役員の人達が積極的に携わってこなかったクライミング・コンペンションに手間を取られ、クライミング・ボードやルート・セッターなどの予算もままならない現状では、競技部門を切り離してこれと叫びたくなる気持ちも判る。一方、スポーツクライミングが盛況になり、優秀な選手が出てくれば、世界選手権、ワールドカップなどの選手派遣に国から補助金は出る。然し、補助金はあくまでも補助金であり、自己負担金は増加する。そうすると日山協の一般会計も圧迫され、競技部門に支出する予算が全体の何パーセントが望ましいのか、との意見も出てくるであろう。また、選手登録、ドーピング・コントロールなどクライミングに関わる事務局の仕事量も増大する。

UIAAの総会でも「競技スポーツがなくなればIOCに残るのは難しいのでは」との意見も出されたが、日山協としても競技スポーツを手放して日本体育協会(体協)や日本オリンピック委員会(JOC)に残れるのか、との問題もある。

一方では地球温暖化による水河の減退、乱開発やオーバークラスによる環境問題、ユースの育成、中高年登山者の遭難対策、山岳観光事業など登山に関

わる課題も多い。競技性の低い登山を基盤とするUIAA(日山協も)が競技をどう位置づけていくか、問われている。

最後に今回のUIAA総会の開催にあたりましては地元松本市をはじめ長野県山岳協会の皆様方に多大なご協力を賜りまして誠にありがとうございます。深甚より感謝申し上げます。

(日本山岳協会海外登山委員長)



別れを惜しんで (撮影 柳澤昭夫)

松本国際山岳環境会議

2007の開催について

若月 東 児

十月松本市でアジア山岳連盟総会が開催され、多くの国と地域から関係者が松本に集まる。この機会にアジア自然保護会議をやらう

半は、参加国の自然保護への取り組み状況を聞く会として実施が決まった。

と言う提案が六月の山岳環境七団体連絡会議（日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト、日本ヒマラヤ協会、東京都山岳連盟、日本トイレ協会で構成）で出された。突然のことで、誰が何をやるのか、時間も無い、出来るわけがない。との意見が始めは支配的であったが、提案者の熱心な働き、松本市の支援があるなどの状況が明らかになるに連れ一気に具体化したのが、この「松本国際山岳環境会議2007」でした。テーマを「地球の温暖化」として内容が決定され、そして前半をアジアの参加国からの報告会とし、後

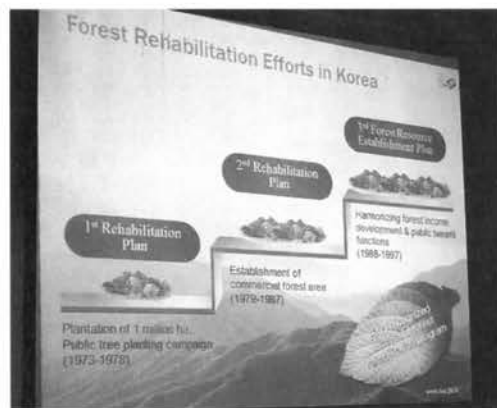
まず、日本からのメイン報告として、ライチョウの生態研究に取り組んでいる山岳環境研究所代表幹事倉隆明（農学博士）先生による「ライチョウの生活と日本の中部山岳地域の現状」と題した報告があった。ライチョウは鳥類の中で、ツンドラ地帯など過酷な条件にも適している。このため、気候により生息環境が変化することにより大きな影響を受ける。針葉樹の葉を食べるハバチが高山に進出したり、ニホンジカの生息環境が高山に拡大したりしている現状が報告され、また、ライチョウの糞便からは、抗生物質耐性の大腸菌が発見されたり、原虫のкокシジウムも検出されている。室堂では皮膚病に罹患したライチョウも発見されていることなど、ライチョウの生息環境が確実に劣化していること。更に、生ごみや尿問題、スキーヤー、登山者など高山利用者の新たなルール作りが必要と訴えた。

次いで、ネパール山岳協会会長アンツェリン・シェルバ氏から「温暖化と氷河地形の姿貌」についての報告があった。

ネパールの高山には誰もが氷河があることを知っている。今その氷河が驚くほどの速さで溶けている。そして、高山地帯に三千個以上の氷河湖を作ってしまった。もしも、雪崩、土砂崩れ、豪雪、地震、そして急激な雪解けによりこの湖が崩壊したらすべてが崩壊され



温暖化による氷河の後退と氷河湖崩壊の危機
発表者：ネパール山岳会長アン・ツェリン
(撮影 柳澤昭夫)



韓国の植林事業について
発表者：韓国山林部長具吉(撮影 柳澤昭夫)

てしまう。ネパールの人々は、地球温暖化に脅かされていると驚くべき現実が報告された。地球温暖化を遅らせるため私達の社会、環境、経済活動を分析し、行動しなければならぬと訴えた。一九八五年に起きた氷河湖決壊での被害額は、五〇〇万ドルにも及んだ。これは平均ネパール人の年収の八千年分に当たるものであったこと。私達は、できる限りの努力はしているが限度がある。手を繋いでこの脅威に挑戦していこう。このためには、持続的に考え、力を合わせ行動しよう。最後にネパールは、訪問者を大歓迎する、将来を見ようとして結んだ。

次に、韓国山林庁具吉本部長から韓国における温暖化対策として取り組んでいる緑化（植林）事業の現状について報告された。一九六〇年代には、一ヘクタール当たり八平方メートルと減少していた山林が現在では大きく復活していること。二〇〇四年における立木蓄積は、一九七五年に比して四倍以上とな

り、八〇立方メートルに増加し、日本の水準の約五〇パーセントとなっていることを報告。また、韓国では二〇の国立公園があり、野生動物の生息環境の増進に務めていること、日本と共通する病害虫問題もあり、両国が連携協力する必要性についても訴えた。最近、国立公園の入場料の徴収を廃止したことが照会され、この廃止により利用者が急速に増加したことなど興味深い報告を聞くことが出来た。

また、日本の山岳団体の取り組み例として、「東京都山岳連盟」からは奥多摩御前山での「カタクリパトロール」や自然保護への理解を深めるための「自然観察会」の実施について、「ヒマラヤ・アドベンチャー・トラスト（H.T.J）」から「国際交流青少年環境体験登山」の紹介、「日本山岳会」から「高尾の森づくりの会」の活動報告をし、アジアに向けて日本の考え方、活動状況を発信した。

日本の山岳地域からは目立ったごみは減ったものの、多くの課題を抱える中で山岳団体が更に協力して山の環境保全、さらには地球規模における温暖化対策にも取り組む必要性を改めて感ずると共に、今や世界が共同して行動する時代であることを再認識した会議となった。

（日本山岳協会常務理事・自然保護委員長）

山と博物館 第52巻 第11号

発行 長野県大町市大町八〇五六一
〒386-0002 市立大町山岳博物館

TEL 026-131-0111
FAX 026-131-1111

E-mail: sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/

印刷 奥村印刷
定価 年額 一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七 一三三九三